

青春は異国の丘

千葉県 石井 利

思い浮かべれば、昭和十六年十二月八日、海空軍真珠湾攻撃により米英に宣戦布告、太平洋戦争が始まり、その十日、現役兵として東京麻布連隊に入隊。出陣準備をして、間もなく北支に渡り、北支派遣軍として軍事教育を受けながら討伐作戦に当たり、各地を転戦、駐屯一年有余。十九年四月満州錦州に転出。部隊は大陸縦断作戦に出発したが、私は残務の教育係として残る。

二十年春、東部国境警備隊に転属、ソ連機動隊に備え壕掘りなどをするも、八月九日夜半、ソ連軍の侵攻により全線で戦闘となる。敵はすでに機動隊で侵入、部隊転出はできず戦車と交戦、約半日戦闘した。敵は大部隊で、破壊しても次から次へと続き進撃してきた。幸いに山の中腹に日本野砲陣地があつて援護射撃をし

てくれたので、戦車と交戦中何とか退却した。

八月十七日、二日遅れて停戦命令を受けた。双方とも雷のような戦闘も静まり、九死に一生を得たのである。しかし、多数戦友を失い残念でたまらない。

その後、要所要所に集結した。日本人は戦いをやめ日本に帰国するのだと言われ、数日間移動した。到着したところは海の見える港で、約十日ぐらいそこで船を待った。船はなかなか来ず、やがて貨車が着き、それに乗せられた。貨車は北方へと広野を走り続けた。十数日間走り続けて着いたところは、後で聞くとところによるとハバロフスクとのことであつた。これでは内地に帰れない。死ねば皆が一緒だと覚悟をした。

貨車には荷物のごとく詰められ、食糧は少なく悪く、その上水も悪く、多くの病人が出た。日がたつにつれ多くの死亡者が続出した。ソ連は、私たちを戦後の復興とあらゆる雑役作業をやらせようとシベリアに連れてきたものの、病人が多く役に立たないと思い、また貨車で満州領内に引き戻したのである。

約一カ月間、車内の生活であつた。牡丹江に着き、

仮病院に入院させられた。その中でも丈夫な人は作業員として、燃料や食糧運びをはじめ、貨車の物資積み毎に毎日労働させられた。

翌二十一年の春四月、また健康になった人たちをもつて大隊を編成し、再びシベリアに連れて行かれたのである。着いたところがウオロシロフ市という所で、自動車部品工場であった。作業は資材運びや雑役、鋳物工場、旋盤機扱いなどいろいろ分担させられた。私は丈夫だったので重労働の鉄割り作業をやった。これは鉄をハンマーで三十センチ角の大きさに割るもので、ノルマは一日四トンであった。ノルマが完遂されなければ、帰さない、休ませない、食べさせないの毎日であり、特別重労働であった。それで特別食の給与でなければ仕事ができない旨申し出て、特別給与を受け、つらい毎日であった。私たちの中でだれかがやらなければと頑張ったのである。

これを半年続け交代してもらい、その後は炊事勤務で、約二百五十人の食事を三人でつくる大変忙しい毎日であった。班長として責任を持たされ、量は少なく、

それに限られた品で毎日献立を変え、普通、朝は量が少ないためにおかゆで、昼は黒パン一キロの八分の一、夕は一杯の米飯又は大豆、コウリヤン飯、副食野菜は乾物であり、すべて塩だけの味付けであった。一年間炊事をやり、その後雑作業で、自動車の助手であった。農場にも行き、野菜の収穫や馬鈴薯掘りであった。

ソ連人は一般に教育程度が低く不器用で、工場の製品も出来上がりが悪く不合格品を多く出すので、工場成績は不振で残念がついていた。その後日本人に作業を任せ、工場の工員が私たちの指示で働くようになると成績が上がり、製品合格も多くなった。工場長初め幹部は大喜び、工場の格も上がり、私たちの発言も強くなったのである。日本に帰るときは、人員があればよいだろうからソ連人を連れて行け、お前たちはソ連に定住してくれと言われるほどだった。

長い長い捕虜生活で、毎日祖国を思い浮かべ、また亡き戦友を思い、さびしい毎日であった。やがて地方人の話によると、日本人は近いうちに東京へ帰れるとのニュースが伝えられ、皆で喜び、生きていた甲斐が

あったと思った。いつ私たちの番が来るかと毎日が非常に長く、元氣をつけ励まし合いながら頑張った。

二十三年九月に「ヤボンスキー、東京ダモイ」と軍部より使者があり、喜びで胸一杯になった。ウオロシロフ駅より貨車に乗り、二日たつてナホトカ港に着いた。数日して汽船が入港、乗り込み、懐かしい日本の国に七年ぶり、祖国の土を踏んだのである。

日本の美しい自然の光景は何とも言えず、涙でいっぱいであつた。いろいろな検査と手続を済ませ、すべて懐かしい復員列車で故郷へ走った。途中、婦人会の接待を受け、そのありがたさが心に残っている。

二十三年十月三日、親戚の人に迎えられ生まれ故郷に到着したが、一生忘れられない思い出である。自分の辛苦を超越して励ましてくれた戦友に深く感謝し、終生変わらぬ親交を願っているものである。

戦後五十年を経た今日、どん底から立ち上がった日本国の姿は、先輩が辛い苦しい環境にもめげず生き抜いた努力が、今日の日本文化や経済を成長させた原動力となったと思っている。

数十万の友よ、安らかに眠りたまえ。戦争のない平和な世界であることを祈ってやまないものである。

在ソ期間三年。

強制抑留の思い出

神奈川県 相原 貞雄

大正十年四月二十日、下曽我村曾我原で生まれる（以下いずれも小田原市）。その後、国府津町に転居、震災で高田別堀に移る。昭和四年、千代尋常高等小学校に入学。昭和六年六月、下府中村鴨宮、現住地に新築転居。したがって下府中小学校に転校。昭和十一年、下府中小学校高等科卒業。

昭和十一年五月、久野（小田原市）日加KKで働く。布地にコットン粉ゴムなどを塗り加工し、人工革製品、ゴム加工布で雨がっぱの製造をする工場であつた。当時は主として海軍、国鉄（現JR）の雨がっぱを加工仕上げし、納品していた。織機もあり、糸から布地の